

No.J2219

『辺境からの中国—黄海島嶼漁民の民族誌』の出版

香川大学経済学部 准教授

緒方 宏海

本書は、文化人類学的視座から、中国の北方辺境に位置する黄海離島の民族誌の研究成果である。これまで極めて限られていた中国の離島島嶼社会に生きる人々の暮らしについて研究上の補填し、更に本書で明らかになった人々の相互行為の特徴から、新たな学術理論の構築に貢献することを目指した書である。具体的には、過去 100 年あまりの間に清朝の崩壊、帝政ロシアと日本による関東州の統治支配、中華人民共和国成立など何度もの政治体制の変化を経験してきた当該島嶼社会の、歴史的な変動と改革開放以降の社会変化を人々の生活史の中で積み重ねて読み解く時、今日人々の生活世界において、ある種の「相互行為」がその社会的結合関係と島嶼社会に影響を及ぼし続けていることを本書で明らかにした。

本書の意義は、文化人類学の手法による 2 年間の実態調査から中国黄海に浮かぶ辺境離島の歴史と現在を民族誌として厚く記し、若者、老夫婦、女性の三つの属性の相互行為の事例から議論を深掘りし、社会の変化と個人の相互行為の選択を事例分析から示し、新たな視座を提示したことである。また地理学、社会学、文化人類学など現在提示されている島嶼社会論の中でも「島嶼性」という概念について、本書は民族誌的記述から島民の日々の相互行為に焦点を当てながら厚く描くことを提案した。すなわち、人が自然を改良することで、島嶼性の定義を構成する辺境性、隔絶性が改善されることを民族誌で詳述し、それゆえ島嶼性は、時代の発展に影響される「状況依存的概念」とも言えることを提示した。本書はまたは「差序格局」を以て、島嶼社会漁民の本質的性格を捉えにくいことを論証した。本書が手がかりとしたのは、ミクロレベルの生活の場で行われる島民の相互行為であった。本書は、単一の構造に統合されない、現代社会において諸個人が多様な社会化を経験しているという現実、異質な複数の構えを身体化した複数的個人の扱い方について問いを投げかけるものでもあり、新たな民族誌の開拓に取り組んだ点に独創性がある。